

《標準臨床検査学》 免疫検査学

矢富 裕, 横田浩充(シリーズ監修) 折笠道昭(編)

免疫学の初心者にも苦手な人にもお薦めの一冊

昭和大学横浜北部病院臨床病理検査部技師長

石井規子

免疫はおもしろい。

ジェンナーの種痘の話やパスツールによる病原微生物の発見などはノンフィクション小説のようである。免疫反応理論を読むと生命の神秘を感じずにはいられない。例えばアミノ酸1個の置換で血液型が異なることもあり、一方で多少の遺伝子の変異や欠損があっても生命は維持できる。HLA型の頻度からは人類の起源と祖先の地球規模の大移動も見えてくる。また生体防御機構はウイルスや細菌と人類との攻防そのものである。

分子生物学の進歩によって現在でも免疫に関する新たな発見が続いており、自分が学生のころの「免疫学」とは大きく異なっている(もっともそのころは「血清学」だったが)。

種の維持には遺伝子の多様性を欠くことはできない。それと同じように「多様性」は免疫のキーワードであり、おもしろさの元でもある。しかし一方で初めて免疫を学ぶ人にとってはこの多様性が難関でもあり、「この反応はこの原理によることもあるが、そうではなくてこの原理によっても起こることもある……」というような無数のケースバイケースの前で立ち往生してしまう。免疫学や輸血学が苦手だという人に聞くと、抗原と抗体の区別が良くわからないという答えが返ってくる。ことがしばしばある。たしかに「ある抗体が抗原となってその抗体に対する抗体が産生される」こともあるのだから混乱するわけである。またさまざまな免疫反応を利用した検査の原理は理解できないままに丸暗記をするには数が多すぎて苦痛である。

本書、『《標準臨床検査学》免疫検査学』は、免

疫学の初心者にも、また苦手意識を持ってしまった人にも取り組みやすいよう、さまざまな工夫がされている。まず各章の冒頭を見てみよう。「学習のポイント」という囲み文章があり、短い文章でその章の内容がまとめてある。章全体の主題が把握できるようになっているのである。次に「本章を理解するためのキーワード」がカラー印刷を駆使して記載されている。重要な語句とその意味が一目でわかるため、試験勉強のきっかけとしても、内容の理解度を確認するためにも有効だと思う。簡潔な本文と表があり、わかりやすいイラストや反応式なども多用されている。全部を通して読み、理解することも、必要な情報を探してその部分だけを読むこともできる構成である。

輸血を例にとると、血液型抗原とそれに対する抗体は基礎的な内容であるが、赤血球型抗原の構造や白血球・血小板の血液型まで最新の情報が含まれる。さらに検査に関してだけでなく輸血の臨床や移植に関する項目もあり、教育機関だけでなく検査の現場でちょっとした知識の確認をするためにも十分に利用することができる。

この本を読むことで免疫に拒絶反応を起こす人が一人でも少なくなれば幸いである。



●B5/頁456/2013年
定価 5,880円
(本体 5,600円 + 税5%)
[ISBN978-4-260-01648-3]
医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)